

うるま市地名散歩 ⑪

名嘉山 兼宏

へんな 平安名 (ヘンナ)

はじめに

うるま市には、平安名地名があり、平安名姓もある。平安名は、沖縄県内ではごくあたりまえの名称だが、他府県の人にとっては、ヘンナ名称に感じらるらしい。私の友人に平安名さんが数名いるが自ら名乗るときは「ヘンナおじさんです」といつて周囲を和ませている。それからすると珍しい姓であっても決してヘンナ姓ではなく、「平安」をもたらす姓ということになり、これをヘンナ風に受け取る人がヘンである。

平安名の位置と歴史

平安名は、勝連半島のほぼ中央部に位置し、現在の集落は県道8号線の両サイドに沿うように広がる。南は中城湾に臨み、北方は屋慶名と接し、金武湾を眺望することができる。

平安名貝塚は、南方の中城湾を臨む丘陵斜面に形成された貝塚時代(前期〜中期)のものとして知られている。

比殿ワイトウイは平安名の集落から通ずる断崖を割りとって昭和7年から3年の歳月をかけて昭和10年に完成された。地元住民の誇る歴史的な遺産として中城湾側に記念碑が残る。

また、人材も豊富でこれまで多くの勝連の歴代首長をはじめ、政界、教育界、経済界などに多くの有為な人材を輩出している。特に一字から医者が20名かくも出ていることは特筆される。



市の指定史跡 ワイトウイ

平安名地名を考える

平安名の地名については次のような説がある。

①「蛇・パオ」説

宮古の平安名崎については「ヘンナザキ」とはいつても、今も方言では「ピャウナ・ザキ」であり、「ピャウ」はバウ、蛇の意である。東・西ともにその形態は蛇に類似している。「ナ」は地理的空間を示す接尾語であろう(『地名を歩く』(仲宗根将一・ボーダーインク)。いわ

ゆる、東平安名崎・西平安名崎の形状からきた「蛇」説である。

②「半島・岬」説

『平安名字誌』は、平安名の名称について『沖縄地名考』(奥田良寛春著)から引用している。その要旨を述べる。「ヘンナ地名は、半島に密接な関係がある。宮古島の東ヘンナ岬、西ヘンナ岬、ヘンナ湾、ヘンナ邑、八重山のヘンナ岳、ヌバン崎、ヘンナ崎、沖縄島のヘンナ邑、パン崎、東ヘンナ崎、辺野古崎、久米島のハンニ崎、以上多くの地名が半島又は岬につく地名になっている。」

両説はその形状や位置などから「ヘンナ」の地名を説いている。宮古の「ピャウナ・平安名」は現在廃村となつているが、保良の隣村にあつた。ここは、東平安名岬の基部の傾斜地にあつて、ヘンナ崎、ヘンナ湾もこの「ヘンナ村」

によって名称されたと考えられる。つまり、ヘンナ岬はヘンナ村の先にある岬と解される。ハンナ岳も伊原間湾を見下ろす中央の山である。辺野古も辺野古崎の根元に位置し、旧集落は辺野古川右岸の丘陵上にあつた。また本市の平安名貝塚も勝連半島の先(岬)と

これらことからして「蛇」説や「半島・岬」説は説得力に弱い。県内の他の

ヘンナ系地名と思われるものをみると、本部ナークニーで知られる「辺名地」は、本部半島八重岳から連なる西部の丘陵地にある。

・ 国頭村辺野喜に「辺奈原」がある。ここは辺野喜川下流、集落に入る右手の急傾斜地一帯になつている。
・ 本市の字平安名と字南風原との境界に「潮辺名原」がある。この「辺名」は平安名と同義であり「潮」、つまり海岸よりのヘンナという意味でここも傾斜地になつている。

以上のことからヘンナは、傾斜地につけられた地名で、平安名貝塚一帯の傾斜地に住んでいた平安名の先人たちが、農耕生活や人口の拡大によって耕地と水を求めて、現在の宮平嶽やウーブ嶽周辺に移動し、定住したと考えられる。

平安名は、その音韻から古い記録(尚貞王代)に「皮揚名」「斐揚那」と書かれていたが、17世紀前半(琉球国高究帳)に平安名と記録されるようになった。平安名の語源は「邊名」であり、意味は「傾斜地の周辺にあるところ」ということになる。

